書簡　六（新編井月全集 513）

赤穂村の問屋、原里原源八家から出した手紙で、折畳の上か飯島吉之丞宛になって居る。（柳哉氏蔵）【問屋とは、宿場役人の家のこと。】

一寸急用申上候

赤穂額面の儀に付、色々手間取、南北奔走移り替難義、夫故兼而（カ）の模様間に合兼、板行延引ニ者（カ）相成候へ共、【赤穂で奉納額を作っていたので、いろいろ手間取ってしまい、衣替えにも難儀し、それでかねてからの計画が間に合わず、刷り物の作成が延びてしまいましたが、】{「額面」は、門人たちの俳句を額装にして、神社などに奉納すること。「移り替」は衣替えのこと。「板行」は版木に彫って印刷すること。なにか俳句集のようなものを計画していたのであろう。}

来月翁忌を御宝前にて御興行被下度、上部、赤木、下牧、表木社中申合出頭可仕候間、何分共御世話の程伏而奉希上候。【来月の芭蕉忌に、御宝前にて連句の会を開いていただきたく、赤穂の上穂（×上部）、西春近の赤木・下牧・表木の仲間たちも申し合わせて行きますので、なにとぞお世話をお願いします。】{「翁忌」は松尾芭蕉の命日のこと。「興行」は連句の会のこと。「御宝前」は神仏の前という意味だが、たぶん床の間に、芭蕉の像か掛軸を飾って、その前で連句の会を開いてほしい、という意味ではなかろうか。}

四五日の内ニハ是非共綿入ニ（カ）さへ相成候へば、鳥渡参上、其節委細御咄し可申上候へ共、只今の場合は実轍鮒の魚と御推察可成下候。書外拝鳳万縷と申縮候。恐々頓首【四～五日のうちに、羽織に綿を入れてもらうためにちょっと参上します。そのときに詳しいお話をいたしますが、今は急いでおりますことをご推察ください。】{「綿入」は、羽織に綿を入れて冬仕度をすること。「轍鮒の魚」は「轍鮒の急」の間違いではなかろうか。緊急事態のことである。}

九月二十七日

なおなお ご しゃちゅうさま そんくんがた よろしく ご かくせい ほどひとえにねがいあげたてまつりそうろうなり
尚々御社 中 様へ尊君方より 宜 御鶴声の程 偏 奉 願 上 候 也【なお、お仲間の皆さまにも、あなた方から宜しく伝えてください。】{「御鶴声」は、あなたの言葉、という意味。}

せいげつきゅうはい あか ほ とい や はらさとていきゃくちゅう
井月 九 拝 赤穂問屋原里亭 客 中

りゅうさいくん ひょうさいくん おんちゅう かみとの じ ま いいじまきち の じょうどの はいよう
柳 哉君 瓢 哉君 御 中 上殿シマ 飯島吉之 丞 殿 俳用